

家庭科教育の課題と今後のあり方に関する研究

－その2 教員・教科書調査と現代の住生活に関する分析－

The problem of the ideal way to provide home economics education in the future

－ Part 2: Survey on teachers and textbooks focusing on modern housing life －

照 林 悠* 石 川 孝 重**
Haruka TERUBAYASHI Takashige ISHIKAWA

Abstract This study concentrates on the content and teaching methods of home economics classes related to areas of residence in high schools. Interviews with home economics teachers indicated that the issues inherent with the subject include a tendency for people to feel less confidence in the classes, the contents of the lessons not being expanded outside of household environments, and the contents of each lesson being selected without a firm understanding of the students' interests.

It was also clarified that encouraging the students to consider the role of the household and family members as observed through modern household lifestyles and the bonds that link people and families together are very important elements in the teaching of home economics.

We therefore suggest that home economics classes related to areas of residence conform more to changes in everyday life situations and include topics that keep the students interested.

Key words: high school 高等学校, home economics 家庭科, area of residence 住領域, modern household lifestyles 現代の住生活, interview ヒアリング調査

1. はじめに

現行の学習指導要領による高校の家庭科教育¹⁾は小・中学校とは違い、学校ごとに採用する科目も、単位数・授業時間も異なっており、生徒が学ぶ内容にも違いが生じている。また、家庭科で扱う領域についても住領域以外の占める割合が高く、住領域の授業にはあまり時間をかけていない傾向²⁾があり、住領域を専門とする教員が少ないという問題³⁾もある。また、家庭科全体として時代の変化により物質的には豊かになってきているが、学習指導要領をはじめとして、指導内容が時代の流れに即応していな

いことや、主要五教科や時間に押されて重視されていない状況であることも問題である。

本研究では、高等学校における家庭科教育について、生活様態の変化に家庭科が即応していないという問題点を改善することによって生徒が興味をもって学べる時代の変化に即応した家庭科住領域における指導内容の提案を目指すことを目的とする。

2. 研究の流れ

本研究では既往文献調査と高等学校家庭科教員に対するヒアリング調査による指導現状と問題点の把握を行う。そして、現代の住生活の実態を踏まえた上で高等学校家庭科住領域の指導に関する提案を行うことによって家庭科教育を充実させていく。研究の流れを Fig.1 に示す。

前回の大学院紀要第17号⁴⁾では、主に文献調査

* 家政学研究所住居学専攻
Graduate School of Home Economics, Division of
Housing and Architecture

** 住居学科
Department of Housing and Architecture

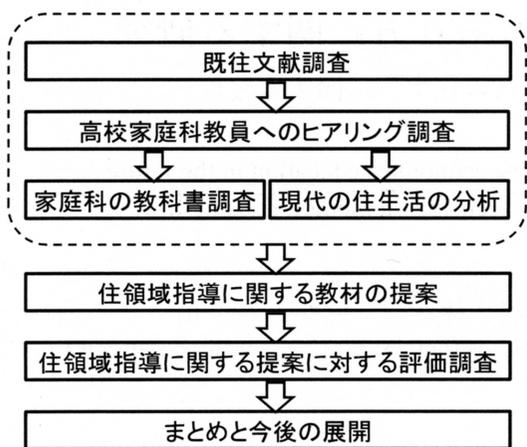


Fig. 1 Outline of Research

の結果についてまとめた。今回は主に高校家庭科教員へのヒアリング調査に関する内容と、家庭科教科書調査、現代の住生活の分析についてまとめる。

3. 高校家庭科教員へのヒアリング調査

既往研究より得た問題点を踏まえ、現在の高校における家庭科、住領域の指導状況を把握するため、高等学校家庭科教員へのヒアリング調査を行った。調査概要と主な調査項目を Table1 に示す。

Table 1 Research summary and major survey items

●調査時期	●所要時間	
2010年10月から12月	30分～2時間／1名	
●調査対象校	●調査校の詳細	
千葉県、東京都、埼玉県の計16校	・国公立別	
●調査対象者	国立高校	3校
各学校の家庭科教員1～3名の計20名 (女性18名、男性2名)	公立高校	6校
	私立高校	7校
●調査項目(家庭科全般)	・男女共学別	
・家庭科の授業時間数に関する意見	男子高校	5校
・内容重複に関して中学、他教科との連携	女子高校	4校
・教員の出身専攻と各領域の時間	共学高校	7校
●調査項目(住領域)	・偏差値別	
・住領域で指導する内容とその決め方	60を超える	7校
・住領域の指導で大切だと思うこと	50以上60以下	6校
・住領域で生徒に教えるべきだと思うこと	50未満	3校

以前から授業時間数の少なさが指摘されているが、今回調査を行った学校でも授業時間数が少ないという実態には変化は見られなかった。2単位の家庭基礎を実施している学校が16校中11校と過半数を占めている。

調査の結果をまとめる。既往研究では教員の指導内容に対する確信の不足が問題として挙がっていたため、現状での指導項目の決め方について調査を行った。結果を Table2 にまとめる。その結果、教科書をベースにしている学校が16校中11校であった。教科書で流れをつくりつつ、生徒の関心等を踏まえて内容を選択していることも明らかとなった。

Table 2 Deciding teaching contents

主な決め方	さらに考慮する点	校数
教科書をベースに	なし	3校
	教員の話し合い	3校
	生徒の関心、生徒に合いそうなこと	2校
	さらに+aをして	2校
	生徒の自立を考えて	1校
学習指導要領に沿って	今後の生活に活かせること	2校
自立の上で役に立つこと	なし	2校
前任者が決定	なし	1校

家庭科のうち、住領域指導に関する項目についての調査から2点の結果を示す。まず、住領域における指導内容についての結果を Table3 に示す。

Table 3 Teaching contents for areas of residence

項目	校数	項目	校数
住まいの環境・安全	10校	平面図読み取り(用語等の知識含む)	6校
平面計画実習(インテリア含む)	6校	賃貸住宅の借り方	4校
日本の住宅事情	4校	住宅情報誌(広告)の読み方(用語等の知識含む)	4校
高齢者の生活・バリアフリー(疑似体験含む場合あり)	4校	住まいの役割・機能・重要性	4校
住居の歴史・文化	3校	住まいの変遷	3校
気候風土と住居	3校	環境保全・資源、エネルギー	3校

調査の結果より、住まいの安全については多くの学校で指導が行われていることが明らかとなった。また、指導内容の特徴として調査を行った学校全てで平面図の読み取りまたは平面計画に関する実習が行われていることが挙げられる。これには学習指導要領が示す、「授業の10分の5以上を実験・実習に配当すること」という記述が少なからず影響を与えているものと考えられる。問題点としては、住領域の指導内容が住居の中の話で完結してしまっていることが挙げられる。住居の外に視点を広げていた学校は1校のみであり、住居の外に視点を広げた指導内容を取り入れていく必要があると考えられる。

住領域で指導しにくい内容についての調査結果をTable4に示す。

Table 4 Contents for areas of residence that are difficult to teach

項目	校数	項目	校数
住環境 (騒音, 換気, 採光), シックハウス等	5校	教えやすいところを指導, 深く教えていない	4校
特になし	4校	まちづくり	3校
様々な家庭があり, それぞれの暮らしに 結びつけることに難 しさ	3校	構 造	2校
インテリアデザイン	1校	法 律	1校
歴 史	1校	広さのとらえ方, 動線	1校
住文化, 住空間の成り立ち	1校	平面計画	1校

「教えやすいところを指導し、深く教えられていない」といった意見や、「様々な家庭があり、それぞれの暮らしに結び付けることが難しい」といった意見が複数見られ、教員の指導に関する確信の不足や、生徒の身近な生活に内容をもっていくことの難しさがこの結果から読み取れる。

これらの結果より、教員の授業に対する確信が不足しがちな傾向にあること、他教科との関連や発展があまりない指導方法、住居の外まで視点が広がっていないこと、生徒の興味が明らかでない中で指導内容を選択している可能性があることなどが問題として考えられる。

一方で、人や家族の視点を重視する、実習を多め

に取り入れるなど、家庭科ならではの視点を大切にしながら授業を展開しているという意見が複数の学校の教員より得られた。

4. 家庭科の教科書調査

既往研究⁵⁾における教科書内容の変遷の結果をもとに、1954年から2007年の教科書内容の傾向を調べた。結果をTable5に示す。

Table 5 The tendencies of textbook contents

●継続して内容まで記載されている項目
・健康, 衛生的設備 ・安全 ・住宅とは ・インテリア, 家具, 収納 ・住宅の維持管理
●断続的に内容が記載されている項目
・住宅問題, 住宅政策
●ここ数十年, 継続して記載されている項目
・地域の特徴を持つ住宅 ・福祉 (UD) ・平面図読み取り ・戸建と集住の色々 ・都市, 地域の計画 ・ライフスタイルの変化 ・環境配慮
●ここ数年, 言葉としては記載されている項目
・住み継ぎ, まちなみ保存
●ここ数十年扱っていない, 著しく減った項目
・各室の機能 ・建築材料 ・都市問題, 都市政策 ・能率的, 科学的設備

「地域の特徴を持つ住宅」「都市, 地域の計画」の項目をはじめ、近年の傾向として、住居の内部だけの話に留まらず、住居の外に視点を広げる傾向が見られる。この結果とヒアリング調査の結果には相異が見られることから、今後は指導者側に対して視点を住居の外へ広げるための働きかけが必要であると考えられる。

5. 現代の住生活の考察

家庭科が現代の生活様態に即応できていないという問題に関して、内閣府の「国民生活白書」⁶⁾と既往研究⁷⁾より、家庭科住領域で必要な要素を現代の住生活との関連から6つの項目について考察した。考察した6つの項目は「技術・サービス」「就業」「住まい方」「人間関係」「家族-形式」「家族-精神面, つながり」である。それぞれについて考察点をまと

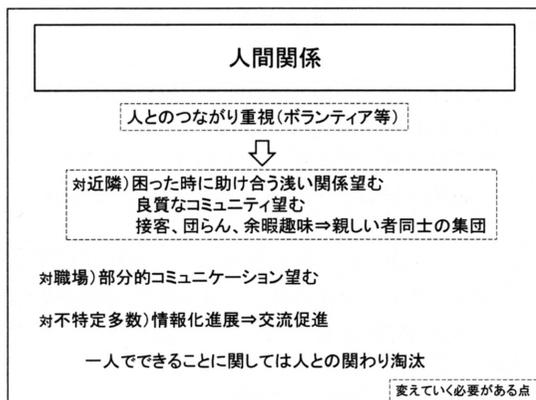


Fig. 5 Modern human relations

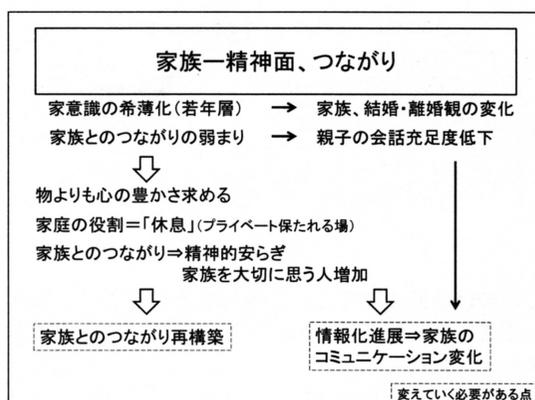


Fig. 7 Modern family relationships

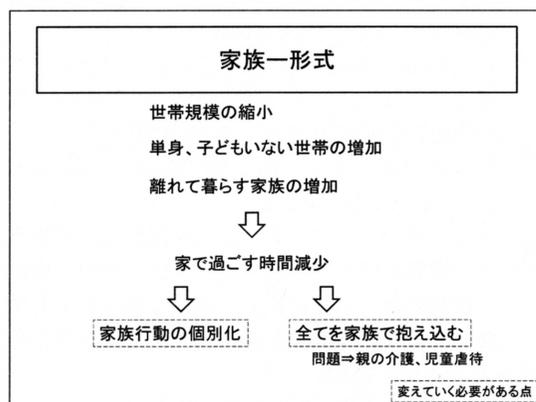


Fig. 6 Modern family formations

最後に「家族—精神面、つながり」についてまとめたものを Fig.7 に示す。

特に若年層で家意識の希薄化が見られ、家族、結婚・離婚観の変化が起きている。その一方で、家族とのつながりが精神的安らぎであると捉える人が増え、家族を大切に思い、つながりを再構築する傾向も見られる。また、情報化の進展によって家族のコミュニケーションは変化しつつあることも明らかである。

現代の住生活に関するこれらの現状から、ストレス化の進む現代社会のなかで、それを受け止める家庭・家族の役割、人や家族とのつながり・コミュニティを考えていくことなどがこれからの家庭科住領域指導には重要な要素であると考えられる。

6. 住領域指導に関する提案

現場のニーズと指導していくべき内容、指導方法を検討し、生徒が興味をもって取り組める住領域指導に関する提案を行うこととした。提案内容は、生徒が授業で使用する教材と、教員用の指導補助資料の2点とした。指導項目は4点である。指導項目についての詳細を Fig.8 に示す。

教科書内容の概要	
●単元1「生活と住居の変化」	住居の役割・機能
	住宅のあり方や概論 住宅の変化 様々な住宅
●単元2「空間と人とのつながり」	行動と空間の機能
	住宅をとりまく環境 施設・設備 住宅の維持管理
●単元3 住環境 一場所による暮らしの違い	住環境の問題や政策
	住宅問題・政策 都市問題・政策
●単元4「つくり手から見た住居」	その他 まちなみ保存 環境配慮

Fig. 8 Proposed teaching items

住領域指導に関する提案では現在の教科書が扱う内容を少し深めた内容を扱い、少ない授業時間数のなかで展開ができるよう、各1～2時間の授業で行う設定とする。提案のポイントを Table6 に示す。

現代の住生活で重要な要素として出てきた「家族・人」を中心とした視点で構成すること、住居の外まで視点を広げること、「考える」ことによって、自分

Table 6 Points of the the proposal

項目	提案に落とし込むポイント⇒関係する調査結果
1	家族・人を中心とした視点で構成する⇒ヒアリング調査・現代生活との関連
2	住居と住居の外の両方に視点を置く⇒ヒアリング調査・教科書の傾向
3	多様性を理解させる内容にする⇒ヒアリング調査・教科書の傾向
4	「考える」実習を多く取り入れる⇒ヒアリング調査
5	他教科との関連性を出す⇒ヒアリング調査・他教科との関連

だけの価値観だけでなく、多様性を理解させる構成にすることで、他教科との関連性を出すことを主なポイントとした。

今後は提案に対する評価調査を進め、最終的には生活様態の変化に即応した、かつ生徒が興味をもって学べる家庭科住領域に関する提案を目指す。

【要約】

本研究では、高等学校の家庭科住領域の指導内容・指導体制に着目した。家庭科教員に対して行ったヒアリング調査では、教員の授業に対する確信が不足しがちな傾向にあること、住居の外まで視点が広がっていないこと、生徒の興味が明らかでない中での指導内容の選択が問題として浮かび上がった。

また、現代の住生活の考察を通して家庭・家族の役割、人や家族とのつながりを考えさせることが家庭科において重要な要素であることが分かった。

生活様態の変化に即応し、かつ生徒が興味をもって学べる家庭科住領域についてこれらを踏まえた提案を行いたい。

謝辞

本研究にあたり、ヒアリング調査にご協力いただきました各高等学校の家庭科教員の皆さまに心から深謝する。

引用文献

- 1) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説家庭編，開隆堂出版，300-311，334-340（2000）
- 2) 宮崎陽子他：大学生による高等学校家庭科における住居学習の評価と課題，日本家政学会誌，59，245-253（2008）
- 3) 中村喜久江：新学習指導要領への対応に関する高等学校長の意見の解析（第3報）：家庭科教師の人数の確保と資質について，日本家庭科教育学会誌，34，39-43（1991）
- 4) 照林悠，石川孝重：家庭科教育の課題と今後のあり方に関する研究－その1 文献調査による家庭科教育の現状と問題点の抽出－，日本女子大学大学院紀要 家政学研究所・人間生活学研究科 第17号，59-66（2011）
- 5) 安田絢香：戦後日本の高等学校における住教育の変化について，文化女子大学卒業研究〈論文〉，平成21年度，14-29（2010）
- 6) 内閣府政府広報室：国民生活白書，www8.cao.go.jp/survey/index-ko.html
- 7) 浅見美穂：ライフスタイルの変遷からみる住まいの機能に関する研究－女子大生とその家族の三世代の暮らしを対象として－，日本女子大学大学院家政学研究科住居学専攻2010年度修士論文，54-161（2011）